
ネギま！ ～死神の力を使いし少年～

気ままな子犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！ ～死神の力を使いし少年～

【Nコード】

N9251K

【作者名】

気ままな子犬

【あらすじ】

神が逃がしてしまった悪魔に殺され青年がBLEACHの世界の能力を使ってネギま！の世界行きます。この作品が処女作なのでよろしく願います

第一話

「どこ、どこ？」

辺り一帯は真っ白である。

「たしか家で寝ていたんだが？」

「目が覚めたか？」

気がつかないうちに目の前に杖を突いた老人がいた。

「あの、どちらさまでしょうか？」

「ふむ、思っていたよりおちついていな。

まあよいわしは神じゃ。」

「本当ですか？」

「本当だ。わしは正真正銘、神だ。」

「でその神が私になんの用ですか。」

「そのことなんだがまず最初に謝らなければならない。」

「???どういうことですか？」

「うむ心して聞け…………おぬしは死んだのじゃ？」

「なんですって?それは本当ですか？」

「うむわしが管理していた悪魔が脱走してしまつてその先で眠つたままのおぬしを殺したのだ。」

「それで悪魔に殺された俺になんの用ですか？」

「わしのせいで死んでしまつたからな、謝罪としてはなんじゃが異世界に送ることにしたんじゃ。」

「！！」

「異世界にですか！？」

「うむ、とは言つてもおぬしの体は悪魔に食われたため体はないんじや。」

ふむ、なるほど。

「ではどうするんですか？」

「とりあえず新しい体を準備したんじや。それでおぬしがいく異世界はネギま！になつてゐる。」

ネギま！か・・・面白そうだからいいか

「わかりました。」

「うむ。すまないな。それで向こうでまた死んでもらつては困るからな

特典をつけることにした。」

まあたしかにまた死んだら意味ないからな・・・。

「それじゃあ、とりあえずブリーチの黒崎一護の斬魄刀の天鎖斬月をお願いします。」

それと鬼道、瞬歩、白打を使えるようにしてください。

鬼道は九十番台まで使えるよいにしてください。それと虚化をできるようにしてください。

あと魔力はナギ・スプリングフィールド、気はラカン・ジャックくらいでお願いします。

それと時間は大戦初期頃でお願いします。」

「うむ、そのぐらいならまかせなさい。それだけでよいのじゃな？」

「はいよろしくおねがいます。」

「うむ。すべては私が招いたことなのに申し訳ないな。」

「いえ、気にしないでください。」

「そうかそれでは、よろしくたのむぞ。」

神がそういうと光に包まれた。

主人公設定

名前：龍咲 神威（りゅうざき かむい）

年齢：16くらい

性別：男

容姿：REBORNの風の大人ver^{フオン}

基本的には一護の卍解の状態の黒いロングコートを着ている

能力：死神の能力を持つため空中を走ることができ、

人間の寿命を遥かに超える時間を生きる

瞬閃を使える

瞬歩・白打は四楓院夜一と同じくらい（空蝉も使える）

鬼道は握菱鉄裁を凌ぐほど

霊力はあるがここでは魔力と認識される

魔力はナギ、氣はラカンぐらいある

武器：黒崎一護の天鎖斬月

これからも増えていくつもりです

二つ名：死神（そのまんまの意味です）

仮面の剣士

パクティオーカード

主 ナギ・スプリングフィールド

名前表記 RYUZAKI KAMUI

称号 異次元を渡る者

色調 Nigror(黒)

徳性 audacia(勇氣)

方位 centrums(中央)

星辰性 Saturnus(土星)

アーティファクト こころの奥の仮面

アーティファクトの特性：虚ホロウの仮面が額に出てくる

これをつけている間、鬼道や月牙天衝（

etc）の威力が増加する

それに虚閃セロを打てる

第二話

「……………ここはどこだろう？」

「神に送られたのはいいとしてここどこだ？」

「人が見つかるかも知れないしとりあえず歩いてみるか？」

ナギside

「んっふっふっこいつが旧世界は日本の鍋料理って奴かあ」

「いやっつまそっじゃねえか！！」

「じゃさっそく肉をっ」

「あっ！ナギおまつ……………何肉を先に入れてるんだよ。」

「いいじゃねえかうまいもんから先だよ　ホラホラ」

「バツ　バカ　火の通る時間差というものがあってだな。」

「うるせ々な詠春は……………」

「フフ……………詠春知っていますよ日本では貴方のような者を……………」

「なんだよアルもったいぶらないで早く言えよ」

「鍋將軍……………と呼び習わすそっですな」

ナベ・シヨーグン!? かつこいいな おい!

「わかったよ 詠春 俺の負けだ今日からお前が鍋將軍だ。」

「んー…嬉しくないなー」

なにが不満なんだよ 將軍だぞ將軍!!

・
・
・
・

「姫子ちゃんにも食わしてやりかいくらいの旨さだな」

「姫子ちゃ…? ああ オスティアの姫御子のことじゃな」

「まあ…戦が終われば彼女を自由にする機会も掴めるやも…です」

んんんそうだな

「この戦だが…やはりどうにも不自然に思えてならん」

「何が?」

「何もかもだよ お前が言い出したんだろつが鳥頭」

んんんそうだっけ…!!

「食事中失礼~~~~ツ!!!! 俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン!!!」

「いっちょやろうぜツ!!!」

いきなりなんだあの筋肉やるうは・・・いきなり剣なんか投げやがって

「何なんじゃ？あのバカは」

「帝国のって訳じゃなさそーだな えいしゅ・・・ぬお!？」

頭から鍋かぶってるよ・・・

「フ・・・フフフフ・・・フ・・・食べ物を粗末にする者・・・」

「どーしたー来ねーのかー!!! 来ねーならこっちから・・・いッ!!!」

「おやるじゃねえか詠春の攻撃凌いでるぜ」

あ 負けたな よっしゃあ!次は俺が相手だ!!!

「てめえら手エだすなよ」

ナギside end

第三話

アルside

ふむ、やりますねナギと互角とは・・・

「ふむやるのあ奴ナ「ガサガサ」！ッッ！」

私と同じことを思ったゼクト

それより・・・今向こうの茂みが音を出しましたけど何でしょうか？

そうすると茂みの中から16歳くらいの青年が出てきた

アルside end

神威side

誰かに会えたのはいいとしてこの時に出会わなくてもいいも思う

今、目の前にはナギとラカンが戦っている

紅き翼が鍋を食べているところにラカンが強襲を仕掛けた所か

アルビレオとゼクトがこちらを警戒している

「あなたはだれですか帝国の者ですか？」

アルビレオが警戒しながら俺に聞いてくるそんなに警戒しなくても

「いえ帝国の者ではなくたまたまここに来たものです」

とは言ってもアルビレオとゼクトが警戒を解くことはない、そんなとき……

「へっ！！」ヘカトントキス・カイキーリアキス・アストラブサトール・キーリブル・アストラペー『百重千重と重なりて走れよ稲妻千の雷！！』

ナギが放った魔法をラカンが避けて俺に向かってくる魔法俺はそれを鬼道で防ぐ

「なっ！！くっ！！縛道の八十一「断空」！！」「！！！！」

とつさに放った縛道で「千の雷」を防ぐ

「まさかナギの「千の雷」を防ぐとは本当に何者ですか？」

「質問に答えるのはいいとしてあの二人の戦いが終わってからでいい？」

「……まあいいでしょう」「どうも」

それから13時間2人は戦い続けた

その間しばらくしてから目が覚めた詠春を含め俺たち4人は自分が何者か紹介しあった

13時間後……

「フ・フフ……やるじゃねえか小僧」

「あんだこそな」

戦いすぎだこの二人はさすがチートキャラとバグキャラだ
戦い終わってやっとふたりが俺に気づいた

アルビレオ（以降アル）とゼクトが俺のことを紹介すると
最初に返ってきた言葉が・・・

「おいお前！俺たちの仲間になれ」「！ナギ」

驚きの返事に詠春が返す

「いいんですか？」「おう！」「ナギ〜〜！」

詠春の言葉を無視して話を続ける俺たち

「じゃあよろしく願います」

こうして俺 龍咲 神威 は第2の人生を歩み始めた

その後、俺は自分が魔法世界や旧世界でもない異世界から来たと言
明した

神に連れてこられたと説明するとややこしくなるため

自分はBLEACHの世界からきたことにした

第四話

アルside

先日仲間になつた神威はとても面白いですね

何でも自分はこの世界とは違う異世界から来たそうですそれにして
尸魂界ソウル・ソサエティや虚、死神に斬魄刀ですか

ほとんどがはじめて聞く言葉ですね。最初は信じれなかったですが
鬼道という力を見せてもらったら納得できました

アルside end

神威side

紅き翼アラルプラに入った俺はあの後ナギと仮契約をした

出てきたアーティファクトは虚ホロウの仮面だった

仮面をつけた状態で月牙天衝や虚閃セロは

ナギの「千の雷」の2倍もの威力に匹敵した

魔法は使えないためにゼクトから少しずつだがおしえてもらっている
どうやら得意なのは炎系と雷系であった

それから多くの戦場を巡ってきたが首都メガロメセンブリアの喉元の
巨大要塞「グレートブリッジ」を落とされたことにより連合は

風前の灯火といえる時、アルギユレーの辺境に追いやられていた俺

たち
紅き翼アラルプラに白羽の矢が立った

その後「グレートブリッジ奪還作戦」は俺たちの活躍により勝利
を収めた

その戦いでナギは「千の呪文の男」って呼ばれるようになった
そして俺は敵兵には「死神（服装から）」
味方には「仮面の剣士」

って呼ばれるようになった

その頃、ナギのファンクラブができた

そしてガトウやタカミチなど新しい仲間達との出会い

「俺の故郷がある旧世界じゃ超強力な科学爆弾が発明されてこんな
大戦はもう起こらねえそうだ戦を始めたが最後みんなまとめて
滅んじまうからだってよ」

「だがこっちのこの戦はいつ終わる？」

ナギの言葉をみんなが黙ってきいている

「やる気になりやこの世界にだって旧世界の科学爆弾以上の大魔法
はある

こんなこと続けてどうなる？意味ねえぜ！！まるで・・・」

「・・・まるで誰かがこの世界を滅ぼそうとしているかのようだー
ーですか？」

「・・・ある意味そのとおりかも知れないぞ」「ガトウ」

ちょうどいいタイミングでガトウとタカミチが出てきた

「俺とタカミチ少年探偵団の成果が出たぜ」

「やはり奴らは帝国・連合双方の中枢にまで入り込んでいる」

「秘密結社」コスモエンテレケイア完全なる世界だ」

やっと黒幕のご登場だな

神威 side end

第五話

神威 side

「まったく本国首都まで呼び出す用って何だよ？ガトウ？」

ガトウに質問する俺

「そうだぜ何の用だってんだよ？」

「あつてほしい人がいる協力者だ」「協力者？」

たしかアリカ姫だったけ？

そういつて出てきた人は

「「マクギル元老院議員！！」」

あれじじいだ？

「いや わしちゃう 主賓はあちらのお方だ

ウエスペルタティア王国・・・アリカ王女じゃ」

そういつて後ろから階段をのぼってくるアリカ姫
へへっやっぱ美人だな

さすがナギから能面鉄面皮王女とまで言われているアリカ姫

ラカンは「気安く話しかけるな下衆が」なんて言われているし
まあ俺が話しかけたら「私の視界に入るな青二才が」と言われたい
いよ別に
なんとなく予想していたし

それから俺たち内密に「コスモ完全なる世界エンテレケイア」の

内偵を始めた、ラカンやナギは調査向きではなかったので俺は
ガトウとともに集めた情報を整理している
そんな中ナギはアリカ姫と首都での休暇を楽しんでいた

「こりゃあ・・・」「どうしかしたか神威?」「これを見てくれガ
トウ」「!!!これは!」

俺とガトウが驚いているときに部屋にラカンが入ってきた

「よう ガトウ、神威どうした深刻な顔してよあ」

「ああラカンいや 遂に奴らの真相に迫るファイルを手に入れたん
だが」

「これが信じがたい内容だな いや情報ソースは確かなんだが・
うゝむ

信じていいんだが悪いんだか・しかしこれが確かなら奴らの行
動も・・・」

なやむガトウそんなガトウにラカンは

「んだガトウハッキリしねえなもつとわかり易くいえや」

いやラカンお前に言ってもどうせ興味ねえだろ馬鹿なんだから

「いや言ってもあんたにや興味ない話だよ 多分
それよりこっちの方が深刻だこの男にも「完全なる世界」
との関連の疑いが出てきた・大物だよ」
コスモ エンテレケイヤ

「こいつは・今の執政官じゃねーか!!
このメガロメセンブリアのナンバー2までがやつらの手先なのか
!?!」

知ってたんだな今の執政官コンセルがその爺だつて
以外だ

「確証はまだ無いから外で喋るなよ?」ズズンツ!!?」「!!!」

何だ!?

あれはナギとアリカ姫が出かけているほうだ!!

神威side end

ナギside

「大丈夫か姫さん」「うむ」

「くそつ こんな街中でデカイ魔法使いやがって」「やはり今は・
」

「ああ

奴らの刺客だろアンタと俺どっちを狙ったかは知らねえけどな
けどようやく尻尾をだしたな逃がさねえぞ!!」

追尾魔法かけてやったぜ！！

「よし姫さんは皆おトコ帰ってる俺は奴らの本拠地をぶっ潰し・・・」
ガッ！「ゲエツ」

服ひっぱんじゃねえ首が絞まるじゃねえか！

「・・・私もいこう」「ああ？」

「ここに私を一人残しておく方が危険だとわからぬのか愚か者がそれ」

私の魔法は役に立つぞ？忘れたか鳥頭」

「ハッ・・・いいぜ姫さんついてきな！！」

ナギside

第六話

神威 side

まったくあの馬鹿は・・・

結局あのまま敵本拠地までアリカを連れ回しやがった
敵の下部組織を潰しても意味ねえのに
何のために秘密裏に調査してるのかわかってるのか？

「はぁあの馬鹿は・・・」

「まあまあ神威さん」「まったくじゃあの馬鹿弟子は」

タカミチが声を俺にかけようとする

そのとき廊下の向こう側からアリカ姫がやってきた
タカミチがアリカ姫に声を掛ける

「アリカ姫こんにちわ」「うむ」「ニッコリ」「!!」「」

い、今アリカ姫わ、笑ったか？

「お、おい今アリカ姫笑ったか？」「ヒソヒソ」「は、はい確かに」「
う、うむ」

ひそひそ話しているとアリカ姫が

「昨日のことに関してだが」「!!」「!!」「!!」「ナギに礼を言っという
くれ」

「わ、わかりました」「うむ」

俺は驚きながらも答える

そうして俺らの横を過ぎていくアリカ姫、俺たちはすぐに部屋に入る
詠春が何か叫んでいるがどうでもいいことだ

「詠春さん〜〜！」バタン！

タカミチが部屋のドアを開けながら叫ぶ

「あのコワイ冷血お姫様が今、廊下で僕に向かってニッコリ・・・
僕ビックリしちゃって・・・あ、なんかナギさんにお礼を
伝えて だそです。確かに笑いましたよねっ！」

「うむ 驚いたのじゃ」「ああ、いまだに信じられん」

タカミチの質問に答える俺とゼクト

あの能面鉄面皮王女が笑うとは明日は槍がふるんじゃないのか

それを聞いて体を振るわせる詠春と後ろでクスクス笑っているアル

それからナギは敵拠点の所から奪ったと思われる手紙を出し

「それに・・・ちゃんと証拠も見つけてきたぜ」「な・・・それは・・・」

そしてナギが見つけた手紙からでてきた執政官「コンスル」が話す証拠会話が
出てくる

今俺たちは船の前にいる

アリカ姫は戦争調停のためにヘラス帝国第三皇女と接触しようとしている

そしてなんの因果かおれがアリカ姫の護衛役として俺もともにいくことになってしまった

ナギには完全なる世界コスモエンテレケイアの支部を潰してもらったためだそうだ

「あの証拠があれば戦を終わらせられるのじゃな?」「ま、多分な」

「では、それは主に任す」

「あんたもよくやるぜ戦火の中こんなボロ舟で帝国第三皇女と接触しにいこうってんだからな」

「なんじゃ 心配しておるのか?」「へ?心配?何の?」

バチン!!

あ、往復ビンタくらってる 馬鹿かあの場であんなこと言うなんて

「まあ、いいや心配すんなナギの将来の妻は俺が守ってやる」「」
なっ!!」「」

バチン!!

冗談を言ったら俺もビンタをくらってしまった
冗談だったのに・・・

結論から言おう

つかまってしまった

舟の中に完全なる世界「コスモ エンテレケイア」の下位組織の者が進入してきた
船の中では俺の力を使うことはできないからだ

「おぬしそれでも紅き翼か!？」

「そお言われてもですね。テオドラ様あの中じゃ俺の力は使うことができませんし

ここに来る途中にナギ達が反逆者にされたみたいでして

ここを破壊して突破するよりも

ナギ達が助けに来た方が安全なんですよ」

「おぬし、護衛役のつもりあるのか？」

「ありますけどまだ時期ではありませんから。時期が来たらしっかりと守りますから

それにテオドラ様もしつかり守ってあげますよ」

そういいながらテオドラ様の頭をなでながら微笑む

「~~~~~// // //!!!!」

神威 side end

第七話

あのあとなぜかテオドラ（そう言えと言われた）に妙に気に入られてしまった

ことあることに俺の後ろにいたり、肩車をさせられる
まるでアイガモの親子みたいだ

神威 side

それから幾分の時間が過ぎ

「よお来たぜ 姫さん」

ナギ達がやっと来た

「遅いぞわが騎士」

「おそいぞナギ」

「相変わらず派手だな侵入のしかたが」

「いいじゃねえか」

「神威いってしまうのか？もういっしょにいられないのか？」

「大丈夫だって守ってやるって言ったじゃねえか」

「／／／そ、そうか な、ならすこししゃがめ「なんでだよ？」と、

とにかくしゃがめ!」

「わかったよ・・・ほれこれでいいか?」「うむ・・・アリカ!」お、おいアリカ姫!?!」

後ろから俺の動きを止めるアリカ姫

そして地面に映し出される仮契約の魔法陣

そして・・・チュ

「ぶあつ、これですつといっしょだな」「あ、ああ

「んじゃ神威の仮契約も終わったことだしここを出るぞ」

「何だ　これが噂の紅き翼アラルブラの秘密基地か!

どんな所かと思えば・・・掘立小屋ではないか!」

「俺ら逃亡者に何期待してたんだこのシャリはよ」

「何だ貴様無礼であろう」

「へっへっん　生憎　ヘラスの皇族にや　貸しはあっても借りはないんでな」

「何い?貴様　何者だ」「ナギの永遠のライバル　ジャック・ラカ
ン」

「なに!?おぬしのようなアホが千の刃のラカンじゃと!?!」「へっへっん、文句あるか」

「むっく神威！この阿呆をどうにかするのじゃ！..」

「はっく遊んでるな二人とも」

神威 side end

ナギ side

「あのやけに元気な少女が...」

「ええ ヘラス帝国第三皇女ですね アリカ姫と交渉の為
出向いた所と一緒に敵組織に捕縛されたそうです」

神威と皇女も仲がいいな

「さーて 姫さん 助けてやったはいいけどこっからは大変だぜ
連合にも帝国にも...あんたの国にも味方はいねえ」

今じゃ俺らはお尋ね者だからな

「恐れながらも事実です王女殿下殿下のオスティアも似たような状
況で...」

最新の調査ではオスティアの上層部が最も「黒い」...という可
能性

さえ上がっています」

「やはりそうか...我が騎士よ」

「だから その「我が騎士」って何だよ 姫さんクラスでいったら

俺は

魔法使いだぜ？」

はずかしいじゃねえか

「もう帝国の兵ではないのじゃろならば主は 最早私のものじゃ
「な・・・」

何言ってるんだよ どんな考え方だよ

「連合に帝国・・・そして我がオスティア 世界全てが我らの敵と
いう
訳じゃな じゃが主と主の「紅き翼」^{アラルブラ}は無敵なのじゃろっ？」

「世界全てが敵・・・良いではないか
こちらの兵はたったの8人だが最強の8人じゃ
ならば我等が世界を救おう」

「我が騎士 ナギよ
我が盾となり剣となれ」

へっ 言ってくれるじゃねえか

「やれやれ相変わらずおつかねえ姫さんだぜ
いいぜ俺の杖と翼あんた預けよう」

ナギside end

パクティオカード

主 テオドラ

名前表記 RYUZAKI KAMUI

称号 魂の導き手

色調 Aurum et Nigror (金と黒)

徳性 audacia (勇氣)

方位 centrum (中央)

星辰性 Saturnus (土星)

アーティファクト 千差万別の刀

アーティファクトの特性：BLEACHに出てくる名前の分かる斬魄刀がすべて使える

頭に思い浮かべるとその斬魄刀に変わる

解号を唱えると開放される

隊長格と副隊長格の斬魄刀では隊首羽織

卍解

と副官章も出てくる
も使える

第八話

神威 side

「不気味なくらい静かだな 奴ら」

「なめてんだろ悪の組織なんてそんなもんだ」

あれから俺たちはテオドラやアリカ姫の強力のおかげで味方も
徐々に増えた

そして俺たちは今敵の本拠地の世界最古の都

王都オステイア空中王宮最奥部「墓守り人の宮殿」にいる
ぞくにいう最終決戦って奴だ

「ナギ殿！帝国・連合アリアドネー混成部隊準備完了しました」

あれが若き日のアリアドネー隊長ですか
若い・・・

「おう あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ俺達が
本丸に突入できる 頼んだぜ」

「ハッ それであの・・・ナギ殿」「ん？」

「ササ サインをお願いできないでしょうか？」

これから決戦ですよ？

「連合の正規軍の説得は間に合わん 帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう」

帝国も承諾したつてのに

世界が危ないつてのに何をやってるんだ
国のお偉いさんは

「決戦を遅らせることは出来ないか？」

「無理ですね私達でやるしかないですね」

「既にタイムリミットだ」

「ええ 彼らはもう初めています・・ 『世界を無に帰す儀式』を
世界の鍵『黄昏の姫御子』は今彼等 の手にあるのですから。」

「ああ よおしっ 行くぜ野郎ども」

ナギの声に続いて宮殿の中に侵入して行く俺たち
そして待っているのは

「やあ 『千の呪文の男』また会ったねこれで何回目だい？

僕達もこの半年で君に随分数を減らされてしまったよ

この辺りでケリにしよう」

「ああ」「いくぞ」

詠春、ラカン、ゼクトはそれぞれ雷、炎、水を使う奴と戦い
俺とアルは召喚魔を使う奴と戦い始めた

俺は千本桜で召喚魔の右腕を全て切り落とし

その間にアルが本人に攻撃を仕掛けるが左腕でふさがれてしまう

「くっ！召喚魔をどうにかしないと」

じゃまだな

「そうですね」

「アル 召喚魔をお前が抑えている間に俺が奴をしとめる。頼めるか？」

「わかりました 頼みますよ？」 「もちろんだ」

「いくぞ」「ええ」

「はあ〜！今です神威！！」「おう！」

「アテアット来たれ行くぞ！！ 君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ 蒼火の壁に双蓮を刻む 大火の淵を遠天にて待つ
これで終わりだ！！ 鬼道の八十八 そうれんそっかつい双蓮蒼火墜！！」

召喚師が爆炎に飲み込まれる

それにともない召喚魔が消滅する

「はあはあこれで終わりか」「そうみたいですな」

「ほかの皆は？」「多少の怪我はしたみたいですが無事によつです」

ナギの所にいくと

ナギがフェイトの首を持ち上げていた。つてこの場面は

「ナギ避ける!!」バス!!「ククク!!ナギ」「」「」

「クツ誰だ!？」その時莫大な威力の魔法が来た

「く!神威会わせるのじゃ」「はい」

「来たれ《アデアット》!!縛道の八十一」だんくつ「断空!」「クフティステー・アイギス最強防御」

断空はいとも簡単に突き破り

俺の右腕が吹き飛ぶ

ラカンも両腕が吹き飛んでいるし

詠春はナギをかばっている

そういつてどこかに行こう黒幕

「待てコラてめえ!!」「まかせなジャック」

そして体中から血を流すなナギ

「い・・・いけませんナギ!その体では」

「アル お前の残りの魔力全部で俺の傷を治せ」

「しかしそんな無茶な治癒ではツ」30分もてば充分だ」です
がッ」

「下手したら死ぬぞナギ!!」「死ぬかよ」

ネギに声を掛ける俺

「ふふよかるうワシもいくぞナギ　ワシが一番傷も浅い」「お師匠」

く・・・血の流しすぎたか　意識が

「ナギ「何だよ？」死ぬんじゃねえぞ」

まっ　お前が死ぬ所なんか想像できないんだけどな

「ハッ！！誰に言ってるんだ俺は無敵の千の呪文サスザンドマスターの男だぜ
俺は勝つ！！任せとけ！！！！」

もう無理だな　意識が・・・

神威 side

第九話（前書き）

随分短い文章になってしまいましたけどすみません

第九話

神威 side

「うつ・・・知らない天井だ」

そう言つと部屋のドアが開きアルが入つてきた

「おや、目が覚めたようですね」

「ああ、おかげさまでな・・・ん？」

そう言つとドアの反対の右手から違和感が

そして右側をみると右手を握りながら寝ているテオドラいた

「ああ、彼女は貴方が二日間寝てずけた間ずっとあなたのそばにいましたよ」

「そっか、心配掛けたんだな」

そう言つてテオドラの頭を撫でる俺そつすると

「うつうつん 誰じゃいった・・・神威!？」 「うお!..?」

そう言つておれの首に抱きついてくるテオドラ

「心配かけたな」 「よかったのじゃ〜」

テオドラが落ち着いてからアルに話を聞くと

黒幕はナギがどうにかしたみたいだ

しかし儀式が完成してしまい世界が終わってしまうところ
だったのだが帝国・連合艦隊のおかげで王都オスティアに
押さえ込んだようだそれに

ゼクトが死んでしまったようだ

吹き飛んだ右腕は治って特に支障はない

「そんなことより、神威！記念式典があるのじゃ！じゃから早く行
くぞ！」

「わかったよ」

こうして大戦の幕は下りた

第十話

そのあと俺達は記念式典に出席した

さらに紅き翼アラルプラの映画が作られたそうだ

みんなで見に行ってみたがメンバーの皆を美化させすぎではないだろうか

しかもそのせいかはわからないがおれのファンクラブができてしまった

ファンクラブ設立の資金はテオドラがだしたそうだそのせいで

会長はテオドラらしい

そして今俺達は今

王都オスティア崩落のための救助活動のために
オスティアにいる

「子供、老人を優先して避難船にのせる！

遅れるな！」

アリカ姫も救助活動に参加している

自分の民を一人でも自分の手で助けたいのだろう

そしてそのおかげか被害を最小限に抑えることができた。しかし・

「どうして、アリカ様が戦争の首謀者なんですか!？」

アリカ姫が戦争を起こした首謀者として牢獄されてしまった

2年後には首謀者として処刑されてしまうそうだ

「落ち着けクルト」

「これが落ち着けられますか！？いいんですかナギさん！アリカ姫が処刑されても！？」

「ナギ……」 「……」

あのあと俺達は盗賊団を潰したり、復旧作業を手伝ったり
続けた

そしてもうすぐ二年が経つ

そして今日がアリカ姫の処刑当日

俺達は今紅き翼アラルブラのアジトにいる

「……」

メンバー全員が口を閉じている

「みなさん！どうして行こうとしないんですか！？」

しびれを切らしたクルトが叫ぶ

「たしかに行きたいさそれは皆一緒だ

だがアリカ姫が待っているのはナギだ

それにナギがアリカ姫をほおって置かないさ」

それからすぐに部屋のドアが開きナギが入ってくる

「アリカを助けに行く、来てくれるか？」

「もちろん」「いいでしょう」「一つ貸しな」「当然」

「まったくあの2人も素直じゃないな」

あのあと俺達は処刑場に乱入アリカ姫はナギが助けた

「いいではないですか素直ではないのも

それにアリカ姫みたいなのをツンデレと言つのですよ」

「いやいや アリカ姫がいつデレた？」

デレているアリカ姫が想像できない

「それにしても これアラルブラで紅き翼も一時解散か？」

「そうだな」

「やっと着いたな京都」

旅行として俺に紅き翼アラルブラそれとアリカ姫は今京都に来ている

「どうする先に観光しに行くか？」

「どんな所があるんだ詠春？」

「ふむ そうだなとりあえず「おれは二条城が好きだ」・・知ってるのか？」

「まあ 俺の世界にもあるからな」

「そういえばそうだったな」

「やっぱりいいよね。俺、前世は城とかが好きだったんだぜ？」

「さてこの馬鹿デカイ鬼はどうするだ？」

「デカイ無駄にでかい 何mあるんだこれ？」

「あのと総本山で飯を食っていたらスクナの封印が壊れてしまい暴れていると情報が入った」

「そこで俺達は急遽現場に行き今まさにスクナとにらみ合いになっている」

「なんかおもしろいことが起きるを期待してたんだよ」

「はあ 期待するな 当たっちゃまったじゃねえか」

「で誰がやる？」

「まあ言われなくてもナギとラカンはやるだろな」

「俺はやるぜ」「俺もだ」

やっぱり

そこからはただのタコ殴り待ってるのもめんどくさいので
狛村左陣の黒繩こくじょう天譴てんげん明王みやうおうのもと

ナギとラカンを巻き込んでの一撃のもとに叩き伏せた
後でものすごい怒鳴られたが・・・

まあ解放されたときにちょうど俺達がいたことが
運の尽きだな

第十一話

あのあと俺は魔法世界に戻ってからナギに加えガトウ、姫子ちゃんとマギステル・マギ

として旅をしていたそして今俺はヘラス帝国の首都にいる居たくているわけではない

来なければ賞金首になるとテオドラから脅迫手紙を叩きつけてきたそのためナギ達と別れた

ゼクトが死んでしまっってから練習していなかった魔法の練習を再開している

そしてヘラス帝国に来てから4年の月日がたった

「なに！？旧世界に行くじゃと？」

「ああ、もうヘラスに来てもう4年だからな
もう俺がいなくてもいいだろ」

「おぬしは妾の従者なのじゃぞ！
妾のそばに居なくては意味ないではないか！」

そんなに俺がいなければいやなのか？

「だいじょうぶだつてたまに帰ってくるから」

そういつて、テオドラの頭を撫でる

「~~~~~////な、ならいい
代わりに一週間でできるだけ妾と居る」

そうして2週間後 旧世界に渡った

俺は今日本にいる

あのあとテオドラにいろいろダダをこねられた

そして今俺は関西呪術協会の総本山にいる
旧世界に渡ってから俺はすぐに詠春に手紙を送った
それから少し観光してから日本に来た

「いらつしやいませ、龍咲 神威 様
長がお待ちしています」

「わかりました」

「やあ 神威久しぶりだね いきなり手紙を送ってくるなんて驚いたよ

どうしたんだい？」

「実は折り入って頼みがあるんだが
実はしん「お父様」め・・・い??」

扉を開けて部屋に入って来たのは3歳くらい着物を着た
少女が詠春の首に抱きつく・・・今お父様って？

「こらこら木乃香だめですよ
今友人が来ているのですから」

「いやお父様最近遊んでくれへん
うちさびしいねん」

「あの詠春その子はもしかしてお前の「私の娘ですが？」・・・で
すよね〜」

お前が結婚したのは知っていたがまさかこどもがいたとは・・・
それより彼女が木乃香ちゃんか・・・

「それより神威、頼みたいこととはなんですか？」

おお、そうだったすっかり忘れていた

「ゴホンッじゃあもう一度
実は神鳴流を習いたいんだ」

「そうですね・・・ふむ、
特に問題はありませんよ」

「いいのか？案外あっさりしてるな」

簡単に許したな理由とか問われるとか思っていたんだが・・・

「まあ、貴方と私の仲ではありませんか？
その代わりとってはなんですか
木乃香の相手をしてくれませんか？」

「と、言っと？」

木乃香ちゃんは詠春の膝の上で俺達の話聞いてる

「私はこのとおり長としての仕事がありますので木乃香の遊びそ相手が

十分にできないのです。暇なときでかまわないのでよろしく頼めますか？」

「まあ、そのくらいなら任せる」「では頼みますよ

「ああ。木乃香ちゃん聞いてたとうり

俺の名前は龍咲 神威 って言うんだよろしくね」

「うん うちの名前は近衛木乃香っていうんや

よろしゅう神威はん」

これが俺と木乃香の初めての出会いだった

第十二話

詠春に頼んで神鳴流を習い始めて数ヶ月がたった

あの時詠春に頼まれたとおり暇を見つけては木乃香ちゃんの相手をしている

そして今日も屋敷で木乃香ちゃんという

「木乃香ちゃん今日は何して遊ぶ？」

「ん〜せやな〜ん？」

どうしたんだろ？ん？門の前に誰か来ている？あれは・・・

「神鳴流師範の方が来はったえ」

あれは、鶴子さんに素子ちゃんではないか

それに素子ちゃんの後ろには隠れながらもこちらを見ている刹那がいる

鶴子さんと素子ちゃんとは神鳴流とは関係なく実力があるため

何度も手合わせしてお互いを認めあっている仲である

刹那は道場の隅でひっそり一人で練習しているのを俺がひっぱりだし
2人でよく練習している

その後詠春から彼女のことを頼めないか頼まれた

当然俺は承諾彼女は鳥族と人間のハーフのようだそのため

協会の人たちからも毛嫌いされているようだ

親が2人とも他界しているためか俺を兄もしくは父親のように接し

てくる

「あの子は・・・?」

俺の隣では木乃香ちゃんが刹那に会釈をしながらつぶやいている

「あの子って刹那のことか?」

「あの子刹那って言うん?」

「うんそうだよ・・・何お友達になりたいのか?」

「えっ 何でわかったん?」「顔にかいてあるもの」

俺達が話していると三人が俺達の前に来ていた

刹那はいまだに素子ちゃんの後ろに居る

「神威はん、こんにちわ」「神威さん、こんにちは」

「ええこんにちは鶴子さん、素子ちゃん」

「いやですわ〜呼び捨てでええって前からいってるじゃないですか
それに素で話てください」

「そう やっぱり変?ごめんごめん」

俺達が話してそばで

「うち、近衛木乃香っていうん?

君は?」

「えっと、・・・うちは、桜咲 刹那 て言うん」

「ならせつちゃんやうちのことはこのちゃん
て呼んで〜」

「彼女は・・・」「そう、詠春、長の娘の木乃香ちゃん」「あの子
が・・・」

木乃香ちゃんと刹那がはじめてあつてから1、2年がたった
それからナギが死んだと言うつわさが流れたが詠春と2人で
あのナギが死ぬはずがないと話した
それからガトウが死んでしまった姫子ちゃんはタカミチが引き取っ
たそうだ

あれ以来木乃香ちゃんのこととは刹那にまかした
それを気に神鳴流に本格的に打ち込んだ
それでも暇を見つけては2人の遊び相手をしている
どうやら才能があるらしくものすごいスピードで
技や奥義を取得していったそのせいか詠春が落ち込んでいたのは
いい思い出だ　そして・・・

「まったく、2人ともどこに居るんだ？
もうすぐ昼ご飯だったのに　確か今日は川の近くで遊ぶって言う
ていたな？」

・・・ん？なんか聞こえる？

「このちゃん!!今助ける!!」

な!!木乃香(呼び捨てするように言われた)が溺れている
しかも刹那も木乃香を助けようとしたのか川に入ったのはいいが
刹那も溺れている

「ちっ!」

そうして俺も川に入る。流れが急なのか俺は気で強化して2人を助ける

それから屋敷に戻り2人を屋敷の巫女さんにまかせる

それからすぐに2人は起きたらしい

そこで俺は2人の様子を見に行く

そして扉の向こう側から俺は2人の話を聞いている

「守れなくてごめん このちゃん

ウチもっともっとなつよおなる」

「え.....そんなんええよ

一緒に遊んでくれるだけで」

刹那・・・

そしてすぐに俺は扉の前を離れる

第十三話

あの出来事から翌日

「どうした刹那改まって？」

正座をしている俺と刹那

「神威さんにお願ひがあります」「何だ？」

「ウチに修行を付けてください」

「・・・理由を聞いていいか？」

「ウチには力チカラがありません

このちゃんチカラを守るだけの力が
ウチはそれがほしい」

強い決意を秘めた目が俺の目を見る

俺はこのときある奴のことを思い出した

「ハッ！！誰に言っただ俺は無敵の千サウザンドマスターの呪文の男だぜ

俺は勝つ！！任せとけ！！」・・・ナギ・・・

まったくあいつといい刹那といい、なんて目をしてるんだ

「わかった！！本当ですか！？」「ああ

きつちり鍛えてやる」

「はい！！」

それから俺は刹那の修行の相手をしている

刹那は神鳴流を中心に修行している

鬼道と瞬歩は覚えることができないため白打をすこしかじる程度に教えている

それから数ヶ月たち

「何？木乃香を魔帆良に通わせる？なんでまた？」

魔帆良つていえば関東魔法協会の本拠地であり木乃香の祖父が学園長をしている

学園都市である。そのため魔法使いの教育機関でもあるでも殆どの生徒が裏の事を知らないが

「わかっていていると思いますけど木乃香にはナギやあなたさえも超えるだけの魔力を持っています」

「まあ、それは知っている」

「そのため木乃香を狙ってくる魔法使いがいます

そのため木乃香をお義父さんがやっている魔帆良に入学することにしたんです。神木・蟠桃があるからあそこは前から魔法使いから前から

狙われていますから。あそこには結界もあるからここよりよっぽど安全なんですよ」

「なるほどそれでこの事について木乃香と刹那には言ったのか？」

「いえ、まだこの後言っつもりです」

「そうか・・・それでそれだけじゃないんだろ？」

「分かっていましたか。実は私の代わりに木乃香を魔帆良に連れて行ってくれないか？」

私は長としての仕事がありますから」

「まあ、いいぞ」

「ではよろしくおねがいします。二週間に出發してください」

「ああ、わかった」

それから、木乃香と刹那にその事を話した。

最初は2人とも驚いていた。特に木乃香は嫌がっていたが、なんとか詠春が丸めたがそれから一週間は木乃香が元気がなかったなんとか俺が元気づけたそれから一週間経ち

「それでは神威、木乃香のことをよろしくおねがいしますね」

「ああ、じゃあ木乃香行くか」「うん、じゃあお父様」「ええ」

新幹線の中・・・

「なあ、神威はん・・・」「どうした木乃香？」

俺の隣で窓の外を見ている木乃香が
読書をしている俺に聞く

「うち、せつちゃんにきらわれたんかなあ・・・」

そういえば、刹那が修行を始めてから殆ど一緒に遊んでいなかったな

「どうしてそう思うんだ？」

「だってせつちゃん最近ウチとあそんでくれへんかったもん」

「刹那が木乃香を嫌いになる分けないだろ

刹那にも何か理由があるんだよ

だからきつと前のような仲良しになれるって

だからな、それまで待とう」

いつのまにか俺のほうを向いて木乃香に言う

「うんわかった。ウチ待つ」

「そっか」

「なんかウチ安心したら眠くなっってもうた
寝てもええ？」

「ああ東京に着いたら起こすよ
ゆっくりお休み」

第十四話

東京についてから俺達は魔帆良に向かった

そして俺は今理事長室の前にいる

木乃香は隣の待合室で待っている

「失礼します。龍咲 神威入ります」「うむ」

そして部屋に入った俺の見たものは

後頭部が異様に長い爺と随分と渋くなつたタカミチ

人間かあれ？妖怪の間違えではないだろうか？

「京都からよく来た神威殿」「お初にお目にかかります関東魔法協会理事殿」

「うむワシが関東魔法協会理事の近衛 近右衛門じゃ

さてかたつくるしい挨拶はこの辺にしとくの」

「はあ」

そういうと、いままでだまっていたタカミチが

「ひさしぶりですね、神威さん」

「そうだな、17年振りだなタカミチ」

「ええ、そうですね」

ところでこの後どうするのですか？」

「今日はこっちに泊まるつもりだ
とりあえず暇だから魔帆良内をぶらぶらするつもりだ」

「そうですか」

そういつて理事長室を出る

「それにしても元気そうでしたです」

「まあな」

ガトウのことは聞いた残念だったな」

「はい・・・アスナ姫は記憶を封印して
魔帆良に通ってもらっています
お会いになりますか？」

「いやいい元気なら」「そうですか」

そうして一日が終わる

「それじゃあ木乃香元気だな」

「うん神威はんもほな
せつちゃんに元気にやる〜
いっというてな」

「ああ、じゃあタカミチ木乃香のことよろしくたのむぞ」

「はい、まかせてください」

そして京都に帰ってから数日後

あれ以来刹那は京都弁ではなく標準語をしゃべるようにしている

「そういえば神威さんの持っているカードって何なんですか？」

「カードってこれのことか？」

そう言っつてパクティオーカードを見せる

「はい。神威さんが書かれていますけど」

「これはパクティオーカードって行っつて魔法使いと従者が仮契約したときでるカードだよ」

「仮契約ってなんですか？」

「うーんなんていつたらいいか・・・」

魔法使いには魔法使いミニステル・マギの従者と言っつパートナーがいたほうがいとされてる。元来、魔法使いは呪文詠唱中はまったくの無防備

で攻撃されれば呪文は完成しない。それを守護するパートナーが魔法使いミニステル・マギの従者だ

陰陽道で言っつ善鬼前鬼と護鬼後鬼だな

そしてミニステル・マギになるため魔法使いと契約するのが仮契約だ

そして従者と契約したときにでるのがパクティオーカードだ

それとパートナーは魔法使いの魔力により身体能力を強化できるしな

さらに魔法使いによっつてはパートナーごとに潜在能力をさらに引き出すことができるアーティファクトっつていう魔法のアイテム

「がでる」

「バクティオー仮契約する方法って何ですか？」

「これは言えと？」

「うんいろいろあるけど一番簡単なのは
魔方阵の上でキスだな」

「キ、キスですか」「ああ」

次の日

修行の休憩の間

「神威さん、お、お願いがあります」

「んん」

俺は刹那と一緒に縁側でお茶を飲んでいる

「わ、私とバクティオー仮契約してください」

「ぶぶぶぶ！！ゲホッゲホッ な、何いってんだ！刹那」

「な、何を言い出すんだこの子は！！」

「ですから、私と」「いやそうじゃなくて本気か！？」「はい」

「いやいや刹那はまだ7歳だしまだ従者ってのも早いし」

そうつぶやいたらそれを聞いた刹那が

「じゃ、じゃあ大きくなったら仮契約バクティオーしてくれますか!?!」

「い、いや」してくれますね!?!?」「お、おう」

刹那の気迫に押されて承諾してしまった
どうして俺の周りの女はこう強引なんだ
テオドラとかテオドラとか特にテオドラとか

第十四話（後書き）

刹那の性格が変わっていますね

刹那にとっては木乃香と神威は同じくらい大切です

第十五話（前書き）

少し遅れてしまいました

さてこれで京都での話が終わりました

原作開始に近づいて着ましたね

第十五話

刹那ととんでもない約束をしてから約1年

「龍咲様、お手紙が来ております」

「わかった」

屋敷の人から手紙を置き取り封を開ける
そして送り手の名を見ると
そこには

ヘラス帝国第三皇女テオドラの名が・

「なっ！！！」

手紙の映像には

「おぬしが詠春の所にいるのはわかっておる
妾を5年もほったらかしにするとは良い度胸だな
早く帰ってこんか！！」

どうしてテオドラから手紙が

確か最後に手紙を出したのは1年前

呼び出されないように旧世界にいることがわからない
ように偽装したのに！！

誰だ！誰が教えた！

魔法世界には俺が詠春の所にいることを知っている奴はいない
なら旧世界か、いやしかし協会の奴らには俺の存在を外に漏らさな
いように注意しといた

では誰が・・・いたな 多分テオドラから手紙が来たんだろう「俺
の居場所を知らないかと？」

あいつならバカ正直に答える

そうして俺はそいつに尋問するために部屋を出る

「いるか？」「神威ですか。いいですよ」

「どうしたんですか？」

「いや、実は知り合いから手紙が来たんだが「！！」「」

「そ、そうですか」

拳動不審になりながら答える 詠春が

「どうしてこいつから手紙が来たのかわからなくてな

こいつに俺の居場所を教えた奴をさがしているんだが」

「わ、私はテオドラ姫からの手紙なんてしりませんよ！！」

ふっ、吐いたな

「ほう、どうしてテオドラからの手紙だと知っているんだ「！！」そ、
それは」

俺は一度もテオドラからとは言ってないんだがな」

「す、すまん！ー！いないと送り返す訳にはいかなくてな
正直に言ってしまったんだ」

冷や汗をかきながら俺に土下座する詠春

「詠春頭を上げる俺は別に怒っていない「ほ、本当か！？」・・・
とでも言うつと思ったか？」

「う、うぎゃあああああああ~~~~~」

屋敷の者が言うには次の日の朝、詠春の顔は雪のように
白かったそうだ

そして一週間後

「神威さん、帰ってしまっんですか？」

瞳を涙で溜める刹那が言う

ああ、なんていう罪悪感

「すまんな どこかの馬鹿のせいだ」

そう言い刹那の隣で居心地の悪そうな詠春を睨む

「あははは、すまない」

「もういい、じゃあな刹那また会えるって」

そういって刹那の頭を撫でる俺

「はい！」

「元気でな刹那、ついでに詠春」

「はい」「返す言葉もない とにかく神威もお元気で」

へラスに帰ってから

帰ったらいきなり顔面にテオドラの蹴りが入った

「おぬしは妾を5年間も放置するとはどういっ了見じゃ！

すこしは妾の気持ちも考えたらどうなのじゃ！

聞いておるのか神威！！」

顔を痛みで抑ええている俺に叫ぶ

それにしても5年の間にきれいになったな見ためは15歳くらいか？

「わるかったって テオドラ」

「ふんっ」

背を向けて拗ねるテオドラ

「拗ねるなよ、テオドラ」

そう言って後ろから抱きしめる

「なっなにをするのじゃ」

「ん いやなのか」

「い、いや そうではないが

そ、そのもっと強く抱きしめるのじゃ」

顔を赤くしながら言うテオドラ

（や、やべ〜かわいい）

「そ、そうか（ぎゅ）（うう）か？」

「うむ、今日はずっといるのじゃ」

「わかったよお姫様」

まあ、なんとなく書いてみました(前書き)

タイトルで言ったように

思いついたので書いてみました

ではどうぞ

まあ、なんとなく書いてみました

テオドラside

「むっ、手洗い」

そして用が済み部屋に戻る途中

「ふあ〜早く寝るのじゃ 明日は神威と遊ぶからの」

寝ぼけながら部屋に入る

そして布団に入る

「ふ〜むあつたかい 神威のにおいがすぬのじゃ・・・むにゃむにゃ」

テオドラの他に別の人がベットにいるが・・・

テオドラside end

神威side

「ふあ〜朝がよく寝た」

寝ぼけながらベットを出ようとする

(んっ なんかベットが膨らんでる)

「なんだ・・・なっ！！　テ、テオドラがどうして俺のベットに!?!」
「ここ俺の部屋だよな? な? な!?!」
読者の皆!?!

「と、とにかくベットからでなければ・・・うっ」

テオドラのパジャマの隙間からむ、胸が　ゴクリ・・・
!?!い、いかん俺の煩惱退散、煩惱退散・・・無理だ〜

「ぬお〜〜」

俺が叫ぶと

「む〜〜うるさいのじゃ誰じゃいった・・・い・・・なっ!!　か、神威
どうしてお、おぬしが妾の部屋に!?!」

「ま、まてテオドラここは俺の部屋だ」

「何?・・・本当じゃ・・・神威何処を見ている?」「い、いや」「

そういつて俺の目線の先をみるテオドラ

そして俺が何を見ているのか理解したテオドラは・・・

「~~~~~ノノノノノノど、何処をみておるのじゃ~~~~~!?!」
ドガッ「グハッ」

テオドラの思いっきりのパンチが俺の顔面に食い込む

「胸に興味があるとはやはり神威も男じゃな・・・」

今度からこれで攻めてみるかの」

そう聞こえ、俺はもう一度夢の中に旅立つ

それ以来テオドラは俺に後ろから抱きつき胸に押し付けたり

俺の顔を胸で抱きしめたりする

俺の前で際どい服を着ている

俺的には目の行き場がない

それに俺のベットに潜り込んで来る機会が増えた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9251k/>

ネギま！ ～死神の力を使いし少年～

2010年10月9日01時00分発行